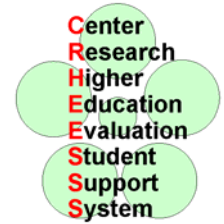


週刊センターニュース No.95



第95号(2006年2月6日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

第3回大学教育セミナーのご案内

日時 平成18年2月28日(火) 13:00~17:30 (受付開始12時30分)

場所 金沢大学サテライトプラザ(西町研修館3階)

主催 金沢大学大学教育開発・支援センター

テーマ 専門職大学院における理論と実務の架橋 知的財産系専門職大学院を手がかりにー(仮題)

詳細は、次号センターニュースおよび当センターホームページ等にてお知らせします。

第105回共同学習会のご案内

日時 2月9日(木)14:40~16:10(通常の時間と異なりますのでご注意ください。)

場所 角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者 西山宣昭(大学教育開発・支援センター)

テーマ「第3回長崎大学大学教育機能開発センターシンポジウム参加報告」

趣旨 1月27日、表記シンポジウムに参加した。長崎大学が採択されている特色GP「特色ある初年次教育の実践と改善」との連携シンポジウムとして開催された。新潟大学、熊本大学、山口大学、九州大学および長崎大学からの各報告の概要を紹介し、教養教育、学士課程教育の各大学における改革の現状を見る。

文部科学省委託事業「教員の所属組織」に関する調査研究、 全国アンケート調査開始

本センターニュースでお伝えしていますように、金沢大学は、文部科学省の「先導的・大学改革推進委託」の委託先の1つに選定され、本学の大学教育開発・支援センターが受け皿となって、委託事業を推進しているところです。

本委託事業のテーマは、「今後の『大学像』の在り方に関する調査研究：教員の所属組織」であり、文部科学省内で、大学設置基準から「講座制/学科目制」にかかる規定を削除する方向で作業が進んでいることを受け、これまでの「講座制」の総括を行うとともに、各大学が、その教育研究目的に適った「教員の所属組織」を編成・再編していく上で有効と考えられる諸課題を対象に調査検討を行いその成果を公にすることを通じて、関係者の便宜に供することを趣旨としています。

本調査研究では、これまで、大学基準協会の工藤潤審査・評価系主幹より、「新制大学」制度下での講座制の採用・運用の経緯について総括的報告が、また、筑波大学の清水一彦教授より、「教育組織」と「研究組織」を分離・運用している大学の先行事例として、筑波大学に係る事例報告がなされました。

本調査研究では、こうした活動と並行させて、我が国大学・学部等における「教員の所属組織」に関連する諸措置の状況や今後の対応等に対する理解を深めることを目的に、全国規模のアンケート調査を行うべく、そのための準備作業を入念に行ってきました。そして、「大学」、「学部」の2本建ての

調査を行うこととし、アンケート調査票を、2月8日付で各大学に送付する手立てを講じたところです。ちなみに、送付内訳は、国立大学については「大学」分86通、「学部」分342通（内、大学院研究科12通）、公立大学については「大学」分73通、「学部」分116通、私立大学については「大学」分210通、「学部」分763通、となっています（本アンケートの内容とその結果等は、本センターニュース等を通じ、あらためて皆様方にお伝えします）。

このほか、本調査研究では、年度内に、国内外の大学の調査を行うことも計画中です。

このうち、国内調査については、7校程度の現地聴き取り調査を計画中です。

国外調査については、6カ国の大学の現地調査を年度内に予定しています。その6カ国とは、具体的にはアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストラリア、韓国です。

（文責 評価システム研究部門 早田）

本学教育学部 FD 委員会主催 第3回教員養成改革フォーラム参加報告

2月3日教育学部 FD 委員会主催の標記フォーラムにおいて、教育学部数学教室の新國先生の公開授業、引き続いて授業検討会が行われたので概要を紹介する。小中高においては授業改善活動の一環として研究授業が日常的に行われていると思うが、同様の取り組みが大学の FD 活動として行われていることを初めて知ることとなった。筆者のほか、理学部、付属小中高の数学の先生方を交え、また教育学部からは数学をはじめ技術、障害児教育、理科などの教科専門の先生方も加わり活発に意見が述べられた。

高等教育における実践的授業研究で知られる京都大学の田中毎実先生は、FD 活動は啓蒙的段階から専門分野ごとの自己組織的な活動へと移行しつつあると述べられている。しかし、筆者の印象では、全国的に開催されている FD 関連のシンポジウム等を見回しても、教育内容まで深く踏み込んだ組織的な教育改善の事例はきわめてまれである。専門分野ごとに比較的分野の近い教員によって公開授業について議論することが大きな教育改善の効果をもたらすことは議論の余地はない。当センターでも青野センター長の発案で始めた専門分野別教育開発セミナーは今年度で2回目を数えたが、今回の教育学部の取り組みは一つのモデルとして注目すべきものである。

公開された授業は、3年後期の代数学演習であった。3時限の現代代数学の講義に引き続いて、講義内容に対応した演習を4時限に行う。位相幾何学を対象としたものだが、中等数学教育での合同や相似の概念は、この位相幾何学に含まれるとのことであった。図形の特徴を基本群と呼ばれる代数的な対象で表現する過程に関わる数学的技法についての演習授業が公開された。図形としてトーラスや穴開きクライ管と呼ばれる閉曲面が扱われたが、学生にそれらを切り貼り工作させるなど、抽象的な数学の概念を具体的な事例と結びつけ学生に体感させることに特に心がけておられるとのことであった。筆者は化学が専門で、代数幾何など教育を受けていないが、事前に配布された予稿がきわめてわかりやすくおよそこの分野の見通しを得ることができた。講義と演習との連携に成功していると思われ、演習をこなした学生が自ら口頭で説明したが、予稿の内容と一致していることが素人の筆者にも理解できた。

公開授業後の討論会では、授業内容についての議論とともに、教育学部での教科専門教育と初中等教育現場で必要となるものとの連関についても議論が及んだ。内容自体に連続性を要求するというよりも、大学で新しい学問に触れ、思いもよらない切り口に出会い感動する体験が、現場で同様の感動を生徒に体験させたいという動機付けにつながるという意見があった。新國先生の授業は、図形の特徴を代数的に表現できるという知的好奇心を刺激するメッセージを含むとともに、抽象的な内容を工作などで具体的に理解させるといった将来必要になるであろう教材開発能力の養成も強く意識された授業設計であったように感じた。（文責 大学教育研究開発部門 西山）